文政絶句抄

澤瀉山人 録

1 鍾馗 管茶山 名晋師字礼郷備後人 鍾馗しゅうき

于思睨目突其冠

うきい かんもく とう そ かん
于思 睨目 突たる其の冠

想見腥風迸指端

おも み せいふう したん ほとほし
想い見る腥風の指端に迸るを。

别有崑墟君識否

べつ ききよあ し いな
別に崑墟有り君 識るや否や、

沈香亭北倚欄干

じんこう ていほく らんかん よ
沈香 亭北 欄干に倚る。

(七言絶句・上平声十四寒韻)

語釈 于思うきい 髭の多い顔。睨目かんもく 突き出た目。突其冠とう その冠を突く。想見おも 思い見る。腥風せいふう 生臭い風。迸指端したん 指先に迸る。别有べつ 別に在り。崑墟ききよ 妖怪。君識否し 君は知っているだろうか。沈香じんこう 熱帯に産する香木、亭北ていほく 沈香亭の北、唐代、宮中に在ったあずまやの名。沈香亭らんかん 唐の明皇が牡丹を賞するため建てた亭、ここに牡丹を賞せしは楊貴妃なり。

倚欄干〓欄干に寄りかかる。鍾馗〓疫病神を追い払う神、唐の玄宗皇帝が夢を見て、呉道子（画家）に画がさせたのが始まり、髭面で、大きい目をしているという。（本姓は菅波といい漢風に菅茶山と称した、一七四八〜一八二七）

2 自宮島還草津舟中

宮島より草津に還る舟中

雨散蓬窗島岫遙

あめ はら ぼんそう しまうま 遙
雨は蓬窗に散じて 島岫遙なり、

柁稜有響午生潮

たりのうま あり びび ありて ひる うしお を 生ず。
柁稜 響き有りて 午に潮を生ず。

尙教風水如儂意

も ふうすい を して わが いの ごとく せしむれば、
尙し風水をして 儂が意の如くせしむれば、

直到防州錦帯橋

ただ いた らん 防州 錦帯橋。
直ちに到らん 防州 錦帯橋。

（七言絶句・下平声二蕭韻）

語釈 雨散〓雨が散る、晴れる。蓬窗〓舟の上屋の窓。苦で葺いた舟小屋の窓。島岫遙〓岫は島、島々遙かに。柁稜〓柁は舟の舵、稜は角、柁の角。有響〓響きがする、音がする。午生潮〓午後潮が生まれる。満潮。儂〓もし、もしくは、万

一。風水＝風と水、山川水流の状態を見て宅地や墓地を定める術。如儼意＝自分の思う通りである、あらば、あれば、直到＝直ちに到着する。防州＝周防の國。錦帯橋＝岩国錦川に架かる五曲桁の橋、五龍橋。

3 即景

即景

碧梧枝上断虹迷
蒼耳林頭返照低
忽見秋山思遠歩
野禽呼過小楼西

へきし じしょう にはじめい た
碧梧の 枝上 虹迷を断つ、
そうじ りんとう へんしょうた
蒼耳の 林頭 返照低る。
しゅうざん たちま み えんぼ おも
秋山を 忽ち見て 遠歩を思へば、
やきん 呼び過ぐ 小楼の西。
にし

(七言絶句・上平声八齊韻)

語釈 碧＝青桐、梧桐、家具などの材料になる。枝上＝枝の上。断虹迷＝虹迷を断つ。蒼耳＝青のみ、蒼だけ。林頭＝林の上の方。辺照＝夕映え。＝忽見＝見ると。秋山＝秋の山。思遠歩＝遠くを歩く思い。野禽＝野鳥。呼過＝鳴きながら過

ぎる。小楼西ころうせい 小さな楼の西。

4 宿生田

生田に宿る

千載恩讐両不存

千載せんざいの 恩讐おんしゅう 両ふたつながら存せず、

風雲長為吊忠魂

風雲ふうん 長とこしえの為に 忠魂ちゅうこんを弔とむう。

客窓一夜聴松籟

客窓かくそう 一夜いちや 松籟しょうさいを聴きく、

月暗楠公墓畔村

月つきは暗くらし 楠公なんこう 墓畔ぼはんの村むら。

(七言絶句・上平声十三元韻)

語釈 千載せんざい 千年。恩讐おんしゅう 恩と讐。両不存りょうふぞん 二つはない。風雲ふうん 風風と雲。長為ながみ 長らく。吊忠魂ちゅうこん 忠魂を弔う。客窓かくそう

旅の宿、窓。一夜いちや 一晚。聴松籟ちゅうそうさい 風の音を聴く。月暗つきくら 月は暗く。楠公なんこう 楠正茂親子。墓畔村ぼはんむら 墓のある村。

5 玉水路上

たままみず
玉水路上

南都山翠北都連

南都なんとの山翠さんすいは北都ほくとに連つらなる、

淀水斜通笠置川

淀水でんすいは斜ななめに通つうず笠置川かさぎがわ。

壊道久無變輜過

壊道かいどう久ひさしく變輜らんろの過すくる無なく、

當歸芍藥滿春田

當歸とうき芍藥しゃくやく春田しゅんでんに満みつ。

(七言絶句・下平声一先韻)

語釈 南都なんと〓奈良の都。山翠さんすい〓山は翠。北都連ほくと〓京都に連る。淀水でんすい〓淀川。斜通ななめ〓斜に通じる。笠置川かさぎがわ〓笠置山から流れ

る川。壊道かいどう〓壊れた道。久無ひさ〓久しく無い。變輜過らんろ〓天子の車が過ぎる。當歸とうき〓山芹。芍藥しゃくやく〓きつねばたん科の多年生草

本、初夏にばたんに似た紅または白の花を開く。満春田みんしゅんでん〓春の田に満ちる。

6 和田享作小倉舟中作

和田享作小倉舟中作

空洋風死四無声

くうよう かせ さえ よも こえな
空洋 風は死て 四に声無し、

鬼語魍魎出水行

きご じゅうじゅう すいこう い
鬼語 魍魎 水行に出で。

遠火一星何処所

えんか いっせい いずこ ところ
遠火 一星 何処の所ぞ、

阿弥陀寺曉鐘鳴

あみだじ ぎょうしょう な
阿弥陀寺 曉鐘は鳴る。

(七言絶句・下平声八庚韻)

語釈 空洋〓空と洋、海。風死〓風が収まる、静かになる。四無声〓四方に声も無い。鬼語〓鬼の言葉。魍魎〓鬼の声。

出水行〓舟で行く。遠大〓遥かに大きい。一星〓小さいの意。何処所〓何処の所、どこかで。阿弥陀寺〓阿弥陀さまを祀

る寺。曉鐘鳴〓曉に鐘が鳴る。

7 冬夜読書

冬の夜書を読む

雪擁山堂樹影深

ゆき さんどう じゆえいふか
雪は山堂を擁して 樹影深し、

簷鈴不動夜沈沈

えんれい とうご
簷鈴 動かず 夜沈沈。
よるちんちん

閑収乱帙思疑義

かん らんぢう おま
閑に乱帙を収めて 疑義を思つ、
ぎぎ おま

一穗青燈萬古心

いっすい せいとう ばんこ こころ
一穗の 青燈 萬古の心。

(七言絶句・下平声十二侵韻)

語釈 雪擁 雪を遮る、雪を頂く・山堂 山のお堂。樹影深 樹が深く繁っているさま。簷鈴 軒に下げた鈴。不

動 動かない、鳴らない。夜沈沈 夜は深く静かである。閑収 閑の収る。乱帙 帙はふまき、文包み、散らばった書物

をいう。思疑義 疑わしくて決定出来ない思い。一穗 穀物の穂先のように、「一穗寒燈」青燈、寒い燈。萬古心

8 老萊子像

老萊子の像

人間萬事尽兒嬉

じんかん ばんじ
人間 萬事 児に尽して嬉しむ、
たの

誰信斯中有是非

だれ しん
誰か信ぜん 斯の中に 是非有り。
こ うち ぜひあ

父母俱存天下樂

父母ふぼ 俱ともに存そんず 天下てんかの樂たのしみ、

春風吹上彩班衣

春風しゅんぷう 吹ふきて 彩斑さいはんの衣ころもに上のぼる。

(七言絶句・上平声四支韻)

語釈 人間萬事〓人は全てのこと。 尽兒嬉〓子供に尽くして喜ぶ。 誰を信じる。 斯中〓この中。 有是非〓正しいことと間違った事、正と否。 父母〓父と母。 俱存〓共に在る。 共に生存している・天下樂〓世の中、世界は楽しい。 春風〓春の風。 吹上〓吹き上げ。 彩班衣〓まだらな彩の衣。

9 遊春

春に遊ぶ

河寛齋 名世寧 字子静 上毛人

老後春遊閑自在

老後らうごの 春遊しゅんゆう 閑自在かんじざい、

只須携酒醉烟霞

只須ただすべからく 酒さけを携たずえて 烟霞えんかに酔よつべし。

中和晴景清明雨

中和ちゅうわ 晴景せいけい 清明せいめいの雨あめ、

踏遍東郊處處花

あまね とつこう しましょ
遍く東郊 處處の 花を踏む。

(七言絶句・上平声四支韻)

語釈 春遊〓春を遊ぶ。閑自在〓閑で自由な暮らし。只須〓ただすべからく。携酒醉〓酒を携えて酔う、飲む。烟霞〓霞と霧。中和〓晴景〓晴れた景色、晴れたさま。清明雨〓二十四氣の一つ、清明節ともいう、春分から十五日目、陰暦の三月の節で、陽暦の四月五日から六日頃にあたる雨。遍〓遍く歩いた、訪ねた。東郊〓東の郊外。處處の花を踏む〓あちらこちらに花を見た。

10 東坡赤壁図

東坡赤壁の図

孤舟月上水雲長

こしゅう つきのぼ ずいうんなが
孤舟 月上って 水雲長し、

崖樹秋寒古戰場

がいじゆ あき さむい こせんじやう
崖樹 秋は寒し 古戰場。

一自風流屬坡老

ひと ふうりゆう はらう しよく
一たび 風流 坡老に属してより、

功名不復画周郎

功名こうみやう 復また周郎しゅうりやうを画えがかず。

(七言絶句・下平声七陽韻)

語釈 孤舟こしゅう一ひと艘そうの舟。月つきは上あり。水雲長すいじゆん水みづも雲うみも広ひろ々と。崖樹がき崖がきの上の上の樹。古戰場こせんじやう蜀吳しやくご連合れんごうして魏えいの大軍たいぐんを破やぶつた、昔むかしの戦場せんじやうの跡あと。一自ひとより一ひとより。風流ふうりゆうなごり、先人せんじんの遺風いふう余流よりゆう、雅みやび・属坡老じゆくぱらう宋そうの蘇軾そしつ、蘇東坡老人そとうぱらうじんに連つなる、従したがう。功名こうみやう手柄てしやうと名聲なせい。不復ふふく還かへらず。画周郎えがしゅうりやう周郎しゅうりやうを画えがく、周瑜しゆいのこと、三國さんごくの呉ごの武將ぶじやう、魏えいの曹操そうたうの八萬はちまの大軍たいぐんを赤せき壁へきで破やぶつた。

11 春雨

春雨

緑暗書窗午懶開

緑暗みどりくらくらき 書窗しよそう 午開ひるひらくに懶ものうし、

風花只任委莓苔

風花ふうか 只任ただまかす 莓苔ばいたいに委ゆたねる。

兼旬寂寂林中雨

兼か旬じゆん 寂寂せきせき 林りん中ちゆうの雨あめ、

繞樹鶯兒久不來

樹を繞る 鶯兒 久しく來らず。

(七言絶句・上平声十灰韻)

語釈 緑暗 深い緑、木が茂っているさま。書窗 書室の窓。午懶開 昼もの憂く開く。風花 風に散る花、風の起る前に一面にわき起る霧、まだら雲。只任 只任す。委母苔 苔に委す。兼旬 十日以上にわたる。寂寂 寂しいさま。林中雨 林の中は雨。繞樹 樹木をめぐる、繞つ。鶯兒 うぐいす。久不來 久しく來ない。

12 美人假寐図

美人假寐の図

一樹棠花御愛香

一樹の 棠花 御愛の香、

春園日暖引眠長

春園 日暖かく 眠を引くこと長し。

多情夢被東風誘

多情の夢は 東風に誘われ、

又上君王白玉床

又た上る 君王 白玉の床。

(七言絶句・下平声七陽韻)

語釈 一樹〓一本の樹木。棠花〓海棠の花。御愛香〓香を愛した。春園〓春の園。〓日が暖かい。引眠長〓眠りが深い。
多情〓感情に富むこと。心の感受性が多いこと。夢被〓夢を見た。東風誘〓東風を誘つ、こち、春風。又上〓またのぼる。
君王〓君主、天子。白玉床〓白玉で飾つた床、寢床。

13 皆川淇園太公釣渭図 皆川淇園太公釣渭の図

皓髮鷹揚御大風	皓髮 鷹揚にして 御大の風、
唯縁西伯夢洵熊	唯だ 西伯に縁り 夢は洵熊。
可憐洛下読書叟	あわ べ らくか たくしよ おきな 憐れむ可し 洛下 読書の叟、
七十過時画太公	しちじゅう すぎ とま たいこう えが 七十 過し時 太公を画く。

(七言絶句・上平声一東韻)

語釈 皆川淇園〓画伯の名。太公〓太公望。釣渭図〓太公望が渭水で釣りをしている図。皓髪〓白髪。鷹揚〓鷹が空に飛び揚がるように、武勇を振るうこと、こせこせしない。御大風〓大物の風。唯縁〓唯縁がある。西伯〓周の文王、西方諸侯の旗頭であった。夢は熊〓夢は涿水の熊。可憐〓憐れむべし。洛下〓洛陽の中、都の中。読書叟〓書を読む叟、老人。七十過時〓七十才を過ぎた時。画太公〓太公望を画いた。

14 春日雑詠 二首之一 春日雑詠

頼杏坪 名惟柔 字千祺 安藝人

春禽 姉 姥 遶 茅 店

日 入 群 喧 忽 已 無

初 月 半 門 隣 女 立

隔 花 喚 返 小 於 宅

しゅんきん 姉 だ たり ぼつてん めく
春禽 姉 姥 たり 茅店を遶る、

ひい むれやかま たちま すで な
日 入 群 喧 しく 忽 ち 已 に 無 し。

しよげつ はんもん りんじょ た
初 月 半 門 隣 女 立 つ、

はな へだ よひかえ しようお と
花 を 隔 て て 喚 返 す 小 於 宅 な り。

(七言絶句・上平声七虞韻)

語釈 春禽〓春の野鳥、鶯。舛蛇〓艶やかで美しい。遠茅店〓茅葺きの店をめぐる、遠る。日入〓日が暮れる。群喧〓群が喧しい。忽已無〓すでにない。初月〓新月、三日月、正月、一月。半門〓門の半ば、半開きの門。隣女立〓隣に立つ女。隔花〓花を隔てて。喚返〓喚び返す。小於兼〓小さな虎、春秋時代楚の方言で、とらのこと。(結句は花を隔てて喚び返す兼よりも小なりと詠むのかも、兼はつなき)

15 陶靖節采菊図

陶靖節采菊の図

首陽潯陽二千年
正氣不銷天地間
誰識西山采薇老
再生采菊見南山

首陽 潯陽 二千年、
正氣 銷せず 天地の間。
誰か識らん 西山 采薇の老、
再生 菊を采りて 南山を見る。

(七言絶句・上平声十五刪下平声通韻)

語釈 陶靖節＝陶淵明・靖節先生。首陽＝潯陽。正氣＝万物の大元である元氣。人の正しい気性。不銷＝溶けない。天地間＝天と地の間、世界。誰識＝誰識。西山＝伯夷・叔齊が餓死した首陽山。采薇老＝ぜんまい取りの老人、唐淵明を指す。再生＝再び生きかえる、役人生活から郷里の自然にかえる。采菊＝菊を採取する。見南山＝南山を見る、終南山、泰山ともいう、古寺・名勝が多い。

16 行郡口號

行郡口號

邑官講利百無遣

ゆつかん こうり ひゃくけん な
邑官 講利 百遣無し、

迂拙我曹何所為

うせつ わ そう なん な ところ
迂拙 我が曹 何ぞ為す所ぞ。

自笑書生餘旧態

おのす わら しよせい きゅうたい あま
自から笑う 書生 旧態に餘り、

半思民苦半思詩

なか たみ の くる おも なか し おも
半ば民の 苦しみを思い 半ば詩を思う。

(七言絶句・上平声四支韻)

語釈 邑官〓天子の直轄地、諸侯の領地。講利〓利を講ずる。百無遺〓百無く遣わし。迂拙〓世間の事に疎く、何かにつけてへまをやる。我曹〓我が仲間、ともがら。何所為〓何をする所。自笑〓自ら笑つ、自嘲。書生〓学生、学問をする人、読書階級の人。餘旧態〓旧態然としている。半思〓半ば思ふ。民苦〓民の苦しみ。半思詩〓半ば詩を思ふ。

17 太宰府有感

太宰府感有り

千里飛梅一夜松

千里せんりの 飛梅ひばい 一夜松いちやまつ

土人迎客説靈蹤

土人どびと 客を迎かくむかえて 靈蹤れいしようを説とく。

座來憶起當年事

座來ざらい 憶おもい起おこす 當年とうねんの事こと。

落日觀音寺裡鐘

落日らくじつ 觀音寺裡かんのんじりの鐘かね。

(七言絶句・上平声二冬韻)

語釈 千里〓非常に遠い距離。飛梅〓梅の香が飛んできた。一夜松〓土人〓土地の人。迎客〓客を迎える。説靈蹤〓靈の蹤を説く。座來〓座つてより。憶起〓憶い起す。當年事〓その当時の事。落日〓日暮れ。觀音寺〓太宰府の隣に在る寺。裡鐘〓寺の鐘。

18 遊吉野

吉野に遊ぶ

万人買酔攪芳叢
感慨誰能与我同
恨殺殘紅飛向北
延元陵上落花風

ばんにん 酔いを買いて 芳叢を攪す、
かんがい 誰か能く 我と同じき。
こんさつ 恨殺す 殘紅の 北に飛んで向うを、
えんげん 延元 陵上 落花の風。

(七言絶句・上平声一東韻)

語釈 万人〓多くの人。全ての人。買酔〓酒を買って飲む、酔う。攪芳叢〓花の咲き匂う草むらを乱す。感慨〓深く感じ

て心が奮い立ったり、嘆いたりする、感動して憤激する。誰能〓誰か能く。与我同〓我とともに。恨殺〓深く恨む、殺は強意の助字。残紅〓残りの紅、残花、残香。飛向北〓北に向かって飛ぶ。延元〓陵上〓天子の墓、丘。落花風〓風に舞つて落ちる花。

19 過詩仙堂

詩仙堂を過る

風流儒雅亦先登

ふうりゆう じゅが いた せんじて 登る、
のぼ

八萬親兵君獨能

はちまん しんべい きみひと よ
八萬の 親兵 君獨り能く。

名節暗知扶世教

めいせつ あんちる せきょう たす
名節 暗に知る 世教を扶く、

一堂花月托残僧

いちだう かげつ ざんそう たく
一堂 花月 残僧に托す。

(七言絶句・下平声十蒸韻)

語釈 風流〓雅、なごり、先人の遺風余ながれ。儒雅〓儒学の教養があつて行いが正しい、またその人。八萬親兵〓八萬

の親兵。君獨能[〓]君獨りにできること。名節[〓]名譽と節操。暗知[〓]暗に知る。扶世教[〓]世の教を扶助する。一堂[〓]一の堂。花月[〓]花と月、美しいものの代表、花を照らす月。托残僧[〓]残僧に身を寄せる、残りは僧として身を寄せる、たのむ。

20 春日雅句

春日雅句

館柳湾 たて 名機 字枢卿 越後新潟人

昨日猶寒南岸柳

昨日 さくじつ 猶 な 寒 さむ し 南岸 なんがん の柳 やなぎ、

今朝已暖北枝梅

今朝 こんちよう 已 すで に暖 あたた かき 北枝 ほくし の梅 うめ。

吹晴送雨互相報

吹晴 すいせい 送雨 そうう 互 たがい に相 あ い報 ほう ず、

信是春風踏脚來

信 しん は是 こ れ 春風 しゅんがう 脚 あし を踏 ふ んで來 きた る。

(七言絶句・下平声十蒸韻)

語釈 猶寒[〓]猶寒い。南岸柳[〓]南岸の柳。已暖[〓]已に暖く。北枝梅[〓]北の枝の梅。吹晴[〓]風に吹かれて晴れる。送雨[〓]雨を送る、晴れる。互相報[〓]互いに知らせ会う。信是[〓]便りは是、これまこと。春風[〓]春の風、東風、こち。踏脚來[〓]あし

ぶみして来る。

21 漫題

漫題

案牘朝朝雖百端

あんたく ちようちよう ひやくたん いえたせ
案牘 朝朝 百端と雖、

暮來塤搯即閑寛

くれきた へいとう すなわ かんかん
暮來り 塤搯 即ち閑寛。

吟窓頼有梅花月

ぎんそう 頼る月に 梅花有り、
吟窓に 頼る月に 梅花有り、

不作尋常俗吏看

じんじよう な ぞくり かん
尋常を 作せず 俗吏の看。

(七言絶句・上平声十四寒韻)

語釈 案牘〓文書、書物。朝朝〓毎朝。雖百端〓百の正しいことはいうけれど。暮來〓暮が來たる。塤搯〓覆い隠すこと。

即閑寛〓即ち閑にゆったりと。吟窓〓窓辺で吟じる。梅花月〓梅花と月。不作〓作らない。尋常〓通常、普通。俗吏看〓

見識のない平凡な小役人、つまらぬ役人を見る。

致遠宅同咏瓶中水仙花 致遠宅と瓶中水仙花を咏む

斂得凌花羅鞍塵

れん りょうか
斂は凌花を得て 鞍塵を羅ねる、

硯頭瓶裡玉生春

けんとう へいり
硯頭 瓶裡 玉生の春。

明窓好借獻之筆

めいそう 好し
明窓 好し 獻之の筆を借りて、

泳練為君書洛神

えいれん きみがために
泳練 君が為に 洛神に書す。

(七言絶句・上平声十四寒韻)

語釈 斂得〓おさめる、あつめとる。凌花〓陵に咲く花。羅鞍塵〓羅はうすぎぬ、連ねる、足袋の塵。塵〓世上の煩わしい事。硯頭〓硯の頭、読書や作文、文筆などの始めのこと。瓶裡〓瓶の裡。玉生春〓美しい玉が生まれるような春、麗らかな春。明窓〓明るい窓。好借〓好んで借りる。獻之筆〓これ筆をささげる。泳練〓鍊つて泳がす。為君〓君の為、君成す。書洛神〓洛水の神の書。

春日即事

春日即事

慶織小雨欲終朝

慶織けいせん 小雨こさめ 朝あさに終おわらんと欲ほつす、

土潤春園宣下鋤

土潤つちうるほいて 春園しゅんえん 鋤しゅうを下おろすに宜よろし。

山童豫作霜秋計

山童さんどう 豫あらかじめ作なす 霜秋そうしゅうの計けい、

矮竹籬邊插菊苗

矮竹わいちくの 籬邊りへん 菊きくの苗なえを挿さす。

(七言絶句・下平声二蕭韻)

語釈 慶織けいせん 僅かな喜び。欲終朝ほつしゅうちゅう 夜が明けようとする。土潤つちうるほ 土が潤う。春園しゅんえん 春の園。宣下鋤せんげしゅう 鋤を下ろすに宜しい。

山童さんどう 山の童。豫作あらかじな 豫め作る。霜秋計そうしゅうけい 秋の霜を計算にいれて。矮竹わいちく 矮小な竹。籬邊りへん まがきの辺り。挿菊苗ささぎくぼえ 菊の苗を挿す、植える。

24 買菊

菊を買う

柏如亭 名昶 字永日 江戸人

賣詩鬻字冷生涯 詩を賣り 字を鬻ぎ 冷やかなる生涯、

一領錦衾両口児 一領 錦衾 両口の児。

過却重陽二十日 却つて重陽を過ぎて 二十日、

閑錢始買傲霜枝 閑錢 始て買つ 霜に傲る枝。

(七言絶句・下平声二蕭韻)

語釈 賣詩 詩を賣る。鬻字 字で鬻ぐ、字を売る。冷生涯 生涯にわたり冷い。一領 領く、承知する。錦衾 錦の衾

錦の夜具。両口児 二人の兒童。過却 誤つて過ぎた。重陽 九月九日。閑錢 小錢、僅かな錢。始買 始めて買つ。傲

霜枝 霜にも枯れない強い菊の花、傲霜は霜にも枯れない、強く正しくて凶暴なものを恐れない人の例え。柏木如亭 (一

七六三丁一八六五)

25 赤羽即事

赤羽即事

追涼士女晚喧嘩

涼を追い 士女 晩て喧嘩

咲語歌声在水涯

咲語 歌声 水涯に在り

赤羽橋好風日夜

赤羽橋は好し 風日の夜

深絶絶属散人家

深く絶絶 属る 人家に散らず

(七言絶句・上平声九佳韻)

語釈 追涼 涼を追う。士女 男女。晩喧嘩 晩には喧嘩。咲語 笑い声。在水涯 水涯に在り。赤羽橋好 赤羽橋が好

ましい。風日夜 風日の夜。深絶 深く絶える。属 仲間。人家散 人家が散らばる。

26 春晝

春晝

風微日暖嬾遊絲

かせわす
風微かに
ひあたた
日暖かく
ゆっし
遊絲に嬾し、
ものう

初覚午園晴景奇

はじ
初めて覚ゆ
ごえん
午園
せいけいき
晴景奇なり。

花影重重無寸地

かえい
花影
じゅうじゅう
重重
すんちな
寸地無し。

多于昨夜月明時

たう
多于
さくや
昨夜
げつめい
月明の時。

(七言絶句・上平声九佳韻)

語釈 風微ハ微風、穩やかな風。日暖ニ日は暖く。嬾遊絲ニ春ののどかな日に野原などに立ち上る氣、蜻蛉、陽炎がもの

うい。初覚ニ初めて覚る。午園ニ昼の園。晴景奇ニ晴れた景色はきれいである。花影ニ花の影。重重ニ重なり合っている

さま。無寸地ニ一寸の余裕もない。多于ニここに多くの。昨夜ニゆうんべ、昨晚。月明時ニ月の明るい時。

27 夜雨

夜の雨

夢覚茅簷着雨軽

夢は覚む
もじえん
茅簷
雨を着けて軽し、
かる

梅窓淡淡月方傾

梅窓 淡淡 月 方に傾く。

寒従点滴声中尽

寒 点滴に従い 声中に尽き、

暖向模糊影裡生

暖向は 模糊 影裡に生じ。

(七言絶句・下平声八庚韻)

語釈 夢覚 夢で見る。茅簷 茅葺きの軒、庇。着雨軽 小雨に濡れて。梅窓 梅窓から見る梅。淡淡 淡い。月方傾 月は方に傾く。

寒従 寒さに従い。点滴 滴が点々と。声中尽 声はなかなば尽きる。暖向 暖さに向う。模糊 ぼんやり

してハッキリしないさま。影裡生 影が生じる。

28 送佐藤大道西遊

佐藤大道の西遊するを送る

大窪詩佛 名行 字天民 常陸人

雨痕晴尽霎時間

雨痕 晴尽す 霎時間、

満路泥深不厭難

満路 泥は深く 難きを厭わず。

明日出関先一笑
雲消富士見全山

明日 関を出で 先ず一笑、
雲は消えて 富士の 全山を見ゆ。

(七言絶句・上平声十五刪韻)

語釈 雨痕〓雨の痕。晴尽〓晴れ尽す、晴れ渡る。雲時間〓雲の時間、雲はあられ、みぞれ、そら、遠い空、夜。小雨の時間。満路〓路に満ちる。不厭難〓嫌である。出関〓関所を出る、故郷をでる。先一笑〓先ず一笑。富士見全山〓富士山が全て見える。

29 春寒

しゅんかん
春寒

寒食従今無幾日
梅花零落杏花開
春寒釀雪力不足

寒食 今より 幾日も無し、
梅花は 零落して 杏花は開く。
春寒 雪を醸して 力足らず、

却向黄昏成雨來

かえ ことごとく むか 雨と成りて來る。

(七言絶句・上平声十灰韻)

語釈 寒食 冬至後百五目にあたる日の前後三日間は火を焚くことを禁じ、冷たいものを食べる。従今 今従う。無幾

日 幾日も無い。零落 草木が枯れ洞む、落ちぶれて淋しい。杏花開 杏の花が開く。春寒 春まだ寒く。釀雪 釀す雪。

却向 却て向う。黄昏 たそがれ、日暮れ。成雨來 雨が降つて來た。

30 世間

世間

世間無限事紛紛

せけん 限り無く 事は紛紛

耳冷如今百厭聞

みみひや 耳冷やかなる 如今 百たび聞くを厭う。

莫笑懶慵蘇學士

わら 笑う莫れ 懶慵 學士蘇り、

總將家政付朝雲

すべ 總て將に 家政 朝雲に付す。

語釈 世間^ニ世の中。無限^ニ限りが無い。事紛紛^ニ紛らわしい事。耳冷^ニ耳に冷い。如今^ニいま、この頃。百厭聞^ニ厭な話を百も聞く。莫笑^ニ笑つでない。懶慵^ニものうい。蘇學士^ニ勉学中の者、学問する人、学者、蘇る、蘇東坡のこと。総将^ニ総大将、総て将に。家政^ニ家事、家の切り盛り。付朝雲^ニ男女のことに付す。

31 虫声

虫の声

世途経尽幾嶮峻
 鐵石心腸冷似氷
 不識虫声亦何意
 向人猶喚磴稜稜

世途^{せいと} 経る^へは 尽^{ことごと}く 幾嶮峻^{いくそりやう}、
 鐵石^{てつせき} 心腸^{しんちやう} 冷^{つめた}きこと 氷^{こおり}に似^にたり。
 識^しらず 虫声^{ちゆうせい} 亦^また何^{なん}の意^いぞ、
 人^{ひと}に向^{むか}つて 猶^なお喚^{よぶ}ぶも 磴^{とう}は稜^{りやう}稜^{りやう}たり。

(七言絶句・上平声十灰韻)

(七言絶句・下平声十蒸韻)

語釈 世途〓人の世の半ばを。経尽〓経て尽きた。幾岨峻〓幾つかの峻しい山々。鐵石〓鐵と石、志などの固く変わらな
 いこと。心腸〓心と腸、心胆。冷似氷〓冷い氷に似たり。不識〓知らない。虫声〓虫の声。亦何意〓亦何の意であろうか。
 向人〓向う人。猶喚〓猶喚く。磴稜稜〓磴は石段、石の坂、稜稜は角、厳しい寒さ、態度のかどばって正しいさま、威嚴
 のあるさま。

32 桃源圖 二首之一

桃源の圖

慇懃迎客剪畦蔬
 醇朴渾如太古初
 唯恨漁翁没文字
 不求秦火以前書

いんぎん 慇懃 かくむか 客を迎えて けいそ 畦蔬を剪る、
じゅんぼく 醇朴 こんじょ 渾如 たいこ 太古の初。
ただうら 唯だ恨む ぎよあう 漁翁 もんじ 文字を没し、
しんか 秦火 いぜん 以前の しよ 書を もと 求めず。

(七言絶句・上平声六魚韻)

語釈 慇懃[〓]ねんころ、ていねい、憂い悼むさま、よしみ。迎客[〓]客を迎へて。剪畦蔬[〓]畔に植えた蔬菜を摘む。醇朴[〓]人情が厚く飾り気がない。渾如[〓]すべて此の如く。太古初[〓]太古の初。唯恨[〓]唯恨む。漁翁[〓]魚釣りの老人。没文字[〓]文字を知らない。学問を止めてしまった。不求[〓]求めない。秦火[〓]秦の始皇帝が民間の書物を焼いたこと。以前書[〓]それ以前
前の書。

33 宿山村

山村に宿る

池桐五山 名孫 字無絃 讚州人

四山堆雪玉玲瓏

四山^{しざん} 雪は^{ゆき} 堆し^{うすたか} 玉玲瓏^{ぎよくれいろう}、

月落荒村夜色空

月は^{つき} 落ちて^お 荒村^{こうそん} 夜色^{やしよく}の空^{むな}し。

炬火隔溪紅一綫

炬火^{きよか} 溪を^{たに} 隔て^{へだ} 紅一綫^{こう}

已知獵手到寒熊

已知^{すで} 獵手^{りょうしゆ} 寒熊^{かんゆう}に到^{いた}る。

(七言絶句・上平声一東韻)

語釈 四山〓四方の山、堆雪〓堆積した雪。玉玲瓏〓玉が触れ合って鳴る音。月落〓月は落ち。荒村〓寒村。夜色空〓夜の空色。炬火〓松明、ともしび、篝火。隔溪〓溪を隔て。紅一綫〓紅が一線に、綫は線の別字。已知〓已に知る。獵手〓獵の手段、獵師の手がせまる。到寒態〓寒態に到る。

34 雨中觀蓮

雨中蓮を觀る

湖光無意為人容
十里空濛烟雨中
却使荷花學西子
澹粧和露洗嬌紅

湖光 無意 人容を為す、
十里 空濛 烟雨の中。
却つて 荷花を使って 西子に學ぶ、
澹粧 露に和し 嬌紅を洗う。

(七言絶句・上平声一東韻)

語釈 湖光〓湖の光。無意〓意無く、なんとなく。為人容〓人のかたちを成す。十里〓遠い、遠く。空濛〓小雨の空。烟

雨中〓雨で煙る中、霧と霧の中。却使〓却つて。荷花〓蓮の花。學西子〓春秋時代周の人をいう、〔詩・大東〕「西人之子」
澹粧〓薄化粧。和露〓露に和す。洗嬌紅〓艶めかしい紅を洗う。

35 梅雨晴

梅雨晴れ

城中昨夜送輕雷

城じょう中ちゆう 昨夜さくや 輕雷けいらいを送るおく

日氣烘紅暑驟開

日氣にっき 紅こうを烘たき 驟にわかに暑ひらさを開ひらく

已作一年鹽漬計

已すでに作なす 一年いちねん 鹽漬しおつけの計けい

家夜芦箔晒黃梅

家いえは夜よる 芦箔ろはくに 黃梅こうばいを晒あびす

(七言絶句・上平声十灰韻)

語釈 城中〓市内。送輕雷〓雷が鳴る。日氣〓陽氣。烘紅〓焼くよつな紅。暑驟開〓暑さ俄に開く。已作〓已に作る。鹽漬計〓鹽漬にする。家夜〓夜の家。芦箔〓芦の簾。晒黃梅〓黃梅を晒す。

36 海上観月

海上月を観る

海若自誇心匠工

海若 かいじやく 自誇 みずか 心匠の工 しんじようたくみ、

銀濤輶出廣寒宮

銀濤 ぎんとう 輶 きし 出 で 廣寒宮 こうかんきゆう。

機関只有魚龍覚

機関 きかん 只有 ただあ 魚龍覚 ぎよりゆうめく、

不到人間注視中

人間 じんかん 不到 いた 注視 ちゆうし 中 うち。

(七言絶句・上平声一東韻)

語釈 海若〓海の神の名。自誇〓自を誇る。心匠工〓心匠の工。銀濤〓銀の波濤。輶出〓めぐり出る。廣寒宮〓月の世界、

月の宮殿。機関〓からくり、伝達活動の装置をもった機械。魚龍覚〓魚や龍、鱗のある動物とおぼしき。不到〓到らず。

注視中〓注目の中。

37 風梅

風梅

群仙宴罷下天壇

群仙ぐんせん 宴罷えんや 天壇てんだんを下る、

玉袂瓊裾翻曉寒

玉袂ぎよくけつ 瓊裾けいきよ 曉寒ぎようかんに翻る。

風駟躡虛人不曾

風駟ふうし 躡虛じようきよ 人は會ひとせず、

眼凡只做落梅看

眼凡がんぼん 只ただ做なす 落梅らくばいを看みる。

(七言絶句・上平声十四寒韻)

語釈 群仙ぐんせん 大勢の仙人。宴罷えんや 宴を罷め下天壇。天壇てんだん 天壇に下る。玉袂ぎよくけつ 玉の袂。瓊裾けいきよ 瓊の裾。翻曉寒ひるがえ 寒い曉に翻る。

風駟ふうし 風を切る四頭立ての馬車。躡虚じようきよ 虚に踏む。人不曾ひとあはず 人に會はず。眼凡がんぼん 平凡な眼。只做ただ 只做す、作す。落梅看らくばい 落梅を看る。

落梅を看る。

38 春水

春水

波多橘州 名徴 字縁あ 京師人

溶溶春漲没磯頭

溶溶よつよつ 春漲はるみなぎりて 磯頭きとうは没ぼつす、

罷釣歸來雨満舟

釣つりを罷やめ 歸かえり來きたたる 雨あめは舟ふねに満みつ。

却憶今朝維纜処

却かえつて憶おもう 今朝こんちよう 纜ともつなを維つなぎし処ところ、

垂楊宛在水中流

垂楊すいよう 宛さながら 水中すいちゆうの流ながれに在あり。

(七言絶句・上平声十四寒韻)

語釈 溶溶溶溶 広大なさま、心・水その他を廣く形容する。春漲春漲 春が漲る。没磯頭没磯頭 磯の頭が没す。釣釣 罷釣を罷る。歸

來來 歸つて来る。雨満舟雨満舟 雨が舟に満ちる。却憶却憶 却て憶つ。維纜処維纜処 纜を繫いだ処。垂楊垂楊 垂れた楊。宛在宛在 あたかも

在り。水中流水中流 水の流れの中に。

39 題画

画に題す

原九節二

雨餘紅日曉瞳朧

雨餘 紅日 曉の瞳朧、

残溜繞簷墜細風

残溜 簷を繞りて 細風に墜ち。

人在画楼春睡起

人は在りて 画楼に 春睡起る、

賣花声已過牆東

賣花の声 已に牆東を過る。

(七言絶句・上平声一東韻)

語釈 雨餘 雨後。紅日 太陽。曉 瞳朧 曉の朝日の輝き初めるさま。残溜 残留。繞簷 軒をめぐり。墜細風 細風が

墜ちる。人在 人は在り。画楼 画く楼閣、画廊。春睡起 春の睡が起る。賣花 花賣り。声已 声已に。過牆東 垣根

の東を過ぎる。

喚晴喚雨鵲鳩啼

晴を喚び 雨を喚びて 鵲鳩 啼く、

刺水新秧緑未齊

新秧を 水に刺して 緑未だ齊しからず。

人与耕牛分路返

人と 耕牛と 路を分けて返る、

(七言絶句・上平声十五刪韻)

語釈 終日〓一日中。無人〓人は無く。相往還〓行き還りの道。乱烟〓霧が煙り。满地〓地に満る。掩柴関〓柴関を掩つ。
誰知〓誰か知る。世上〓世間。難行處〓難行の處。不在〓在らず。山村〓寒村。風両間〓関の両方の風。(田能村竹田)

浮利浮名不至身

浮利 浮名 身に至らず、

撈蝦捕蟹埜溪濱

蝦を撈し 蟹を捕え 埜溪の濱。

釣竿帯得卓然立

釣竿 帯び得て 卓然と立つ、

我是芦花世界人

我は是れ 芦花 世界の人。

(七言絶句・上平声十一真韻)

語釈 浮利〓利に浮かれ。浮名〓名に浮れる。不至身〓至らない身。撈蝦〓蝦を捉え。捕蟹〓蟹を捕える。埜溪濱〓野川の辺、濱。釣竿帯得〓釣竿を携帯して。卓然立〓高く抜きんでて立っているさま。芦花〓芦の花。世界人〓世の中の人。

4 1 画牡丹

牡丹を画く

春殿朝休玉佩虚

しゅんでん ちようきゆう ぎよくばい むな
春殿 朝休 玉佩も虚し、

幾重花影厭階除

いくえ かい かいじょ いと
幾重の 花影 階除を厭う。

唯因天子真堯舜

ただ てんしよ しん ぎようしゆん
唯だ天子に因り 真に堯舜、

一向無人上諫書

いっこう むじん かんしよ たてまつ
一向 無人 諫書を上る。

(七言絶句・上平声十一真韻)

語釈 春殿 春の殿中。朝休 朝参を休む。玉佩 玉を佩しても虚しい。幾重 幾重にも。花影 花の影。厭階除 階を

除けて厭がる、昇殿を厭がる。唯因 唯因に。天子 天皇、主上。真堯舜 真に堯舜。一向 一向に無人 人無し。上諫

書 諫書を上る、奉る。

4 2 題自画漁父

自画漁父に題す

二首為 中嶋子子 近江州人 節一

喚月喚風酒可沽

月つきを喚よび 風かぜを喚よんで 酒さけを沽こう可べし、

一家將去宿芦蒲

一家いっか 將まさに去さりて 芦蒲ろほに宿やどる。

琵琶湖上三万頃

琵琶びわの 湖上こじょう 三万頃さんまんけい、

不属王侯属漁父

王侯おうこうに 属ぞく 漁父りょうふに属ぞく。

(七言絶句・上平声七虞韻)

語釈 喚月〓月を喚び。喚風〓風を喚ぶ。酒可沽〓酒をかうべし。將去〓將に去り。宿芦蒲〓芦蒲の宿。琵琶湖上〓琵琶

湖上。三万頃〓三十町歩。頃頃は面積の単位、百畝のこと。不属〓届かず。王侯〓王と諸侯。属漁父〓漁夫の仲間。

43 班婕妤圖

班婕妤圖はんしやうよす

魚鑰沈沈深掩門

魚鑰ぎややく 沈沈ちんちん 深ふかく門もんを掩おほう

竹煙桐月易黄昏

ちくえん とらげつ こうこん 易昏になり易し

李夫人病名妃嫁

りふじん やまい めいき とつ 李夫人の病 名妃の嫁ぎ

秋扇弁捐猶是恩

しゅうせん 弁まえて猶を 是の恩を捐つ

(七言絶句・上平声十三元韻)

語釈 魚鑰〓鍵、錠前。沈沈〓チンチン鍵の鳴る音。深掩門〓門を掩いて深し。竹煙〓竹に煙る。桐月〓月に桐。易黄昏

〓たそがれ。李夫人病〓李夫人の病。名妃嫁〓名妃の嫁ぎ。秋扇〓秋の扇、転じて不要になつたものの例え、愛されなく

なつた女の例え。弁捐〓わきまえて捨てる、除き去る。猶是恩〓猶是れ恩。班婕妤〓漢の成帝の宮女で、女流詩人、婕妤

は官名でその作「怨歌行」は有名。

44 秋蝶 四首之一

秋蝶

粉淚香残翠黛傷

ふんるい こうざん すいたい きず 粉淚 香残 翠黛の傷

直當喚汝作秋娘

直ただちに當まさに 汝なんじを喚よんで 秋娘しゅうじょうを作なさん。

惜哉近日好詩手

惜おしむ哉かな 近日きんじつ 好詩手こうししゅ、

不見楊州薄倖郎

見みず 楊州ようしゅう 薄倖はうしやくの郎らう。

(七言絶句・下平声七陽韻)

語釈 粉淚ふんるい いろどる涙。香残かうざん 香が残る。翠黛すいだいも傷し。 直當ちくたう 直當たる。喚く汝なんじ。 作秋娘さくしゅうにょう 謝秋娘、杜秋娘、とい

う美人の名、転じて一般に美人のこと、年をとり容色の衰えた女のこと。惜哉おしむ 惜しむ哉。近日きんじつ 近い日。好詩手こうししゅ 好詩

手。不見み 見ず。楊州ようしゅう 楊の州。薄倖郎はうしやくらう 不幸せ、不運な男。

媚態嬌容更似多

媚態びたい 嬌容きょうよう 更さらに多おほくの似ごとし、

輕輕雙翅剪秋羅

輕輕けいけい 雙翅そうし 秋羅しゅうらを剪きる。

聞他織女能相妬

他たに聞きく 織女しよくじよ 能よく相あい妬ねたみ、

休向牽牛花上過

休いこいて牽牛けんきゅうに向むかいて 花上かじょうを過よる。

語釈 媚態めい媚めいびるさま、艶えんめかしいようす。嬌容せう美しい姿、艶えんめかしい姿。更さら似多に更さらに似る多し。輕輕けい輕輕けいしく。
雙翅そう二つの翼、羽。剪秋羅せん秋あきに着るうすぎぬ。聞他もん他に聞く。織女おり機織り女、星せいの名、天あまの川の東あづまにあつて陰曆いん
七月七日しちの夜、天あまの川がはを渡わたつて牽牛星けんに合あつたといふ伝説でんがある。能相妬ねい能く相妬あひく。休向きゅう休やすんで向むかう、憩せいうて向むかつ。
牽牛けん牽牛星けん。花上過けい花上がを過する。

45 送春

送春

秦菱湖 名大任 字致遠 越後新瀧人

蜂狂蝶乱若為情
ほしきまが ちまうらん じゃくい こころ

春事匆匆別恨成
しゅんじ そつそつ べつこん な

維有黄鷄解人意
た こうけい ひと い かい あ

落花枝上不停声
らっか しじょう こえ とど

(七言絶句・下平声八庚韻)

語釈 蜂狂ハチは狂い。 蝶乱マテは乱れる。 若為情若さの為す情。 春事春の事、春の耕作の仕事。 匆匆早々と。 別恨別れを恨み成す。 維有これ有り。 黄鷄黄色の鷄。 解人意人の意を解す。 不停声声停まらず。

46 落霜紅

落霜紅

冷枝疎瘦葉將無

冷枝れいし 疎瘦そそう 葉は 將まさ 無な、

還向窓前綴火珠

還そうぜん 窓前そうぜん 向むか 綴つづ 火珠かしゆ を綴つづ 。

遙想昔年王愷宅

遙はるか 想おも 昔年せきねん 王愷おうがい の宅たく、

石郎悪戯擊珊瑚

石郎せきろう 悪戯あくぎ 擊う 珊瑚さんご で擊う つ。

(七言絶句・上平声七虞韻)

語釈 冷枝冷い枝。 疎瘦痩せて疎らな。 葉將無葉は將に無い。 還向還って向つ。 窓前窓の前。 綴火珠朱色の

真珠の綴り。遙想^ニ遙に想う。昔年^ニ昔。王愷宅^ニ王愷という人の宅、愷はやわらぐ、楽しむ、安らか。石郎^ニ石の郎、石を投げる男か。悪戯^ニいたずら、ふざけて。擊珊瑚^ニ珊瑚で打つ。

47 題山水圖

原九節四

山水の圖に題す

貫名海屋 名包 字茂 河彼人

春寒花荒未飛香
しゅんかん はなす しま かうと

山氣自然經雨芳
さんき しぜん あめ かんば

繞屋千竿不虛設
おく めく せんかん きよせつ

幽人早課聽鶯簧
ゆうじん こと か おうこう き

(七言絶句・下平声七陽韻)

語釈 春寒^ニ春の寒さ。花荒^ニ花はれて。未飛香^ニ香はまだ飛ばない。山氣^ニ山の氣。經雨芳^ニ雨を経て芳し。繞屋^ニ家をめぐる、千竿^ニ沢山な竹、竿。不虛設^ニ虚しく設けない。幽人^ニ隱者。早課^ニ早くからの日課。聽鶯簧^ニ鶯の声をなぞ

らえて聞く。

繞わる。

霏霏溪霧落晴湾

ひひ けい せいわん
霏霏たり 溪の霧 晴湾に落ち、

林樾斜葳屋数間

りんえつ ななめ すうけん
林樾 斜に屋の 数間に葳す。

有客載詩殊未進

かく あ こと いま
客は有り 詩を載せて 殊さらに未だ進まず、

滿舫秋思弄涼潺

まんぼう しゅうし そうせん
滿舫の 秋思 涼潺を弄す。

(七言絶句・下平声七陽韻)

語釈 霏霏 雨や雪がしきりに降るさま。 溪霧 溪の霧。 落晴湾 湾に晴れて落る。 林樾 林の木陰。 斜葳 斜に葳す。

屋数間 数軒の家。 有客 客有り。 載詩 詩を載せる。 殊未進 殊に進まない。 滿舫 舫に満ちる、舟。 秋思 秋に思つ。

弄涼潺 水のさらさらと流れる音と遊ぶ。

垂楊湾外雨初晴

すいよう わんがい あめはじ は
垂楊 湾外 雨初めて晴る、

一夜春江新漲声

いちや しゅんかう しんちやう こえ
一夜 春江 新漲の声。

獨倚層軒看曉色

ひと そつげん み ぎやうしよく み
獨り層軒に倚り 曉色を見る、

漁人艇扱麴塵行

りやうじん てい らう きくじんい
漁人 艇を扱し 麴塵行く。

(七言絶句・下平声八庚韻)

語釈 垂楊 垂れた楊。湾外 湾の外。春江 春の川。新漲声 新しく漲る声。獨倚 獨り依りかかる。層軒 軒を重ね

て、連ねて。看曉色 曉色を見る。漁人 漁師、釣り人。艇扱 舟艇を拾い、雇って。麴塵行 麴の塵を行く、酒の塵を

行く、酒を飲みながら行く。

江村夜静夢還驚

かうむらよるしず ゆめま おどろ
江村 夜静かに 夢還た驚き、

窗外窸窣竹掀声

そうがい さいさい たけ きんせい
窗外 窸窣 竹の掀声。

玉笠銀蓑何処叟

ぎやくくりゆう ぎんすい いずこ おきな
玉笠 銀蓑 何処の叟、

凌晨先我釣清寒

凌晨りょうしん 先さきして我われは 清寒せいかんに釣つる。

(七言絶句・上平声十四寒韻)

語釈 江村江村川辺の村。夜静夜は静か。夜は静か。夢還驚夢がさめ驚く。窓外窓の外。竹掀声竹を持ち上げる。竹竹を持ち上げる

声。玉笠玉の笠。玉玉の笠。銀蓑銀の蓑。銀銀の蓑。何処何処叟何処の叟。何処何処の叟。凌晨晨を凌ぐ。晨を凌ぐ。釣清寒清寒に釣る。清寒清寒に釣る。

48 春曉

春曉

琴春樵 名希声 字延調 近江人

幾回欲起起猶遲 幾回いくかいか 起おきんと欲ほつするも 猶なお遅おそく起おき、

想到前霄未了詩 想おもいいた到いたる 前霄ぜんしやう 未いまだ詩しは了あわらず。

不分山妻惜花落 分わけず 山妻さんさい 花はな 落おちるを惜おしむ、

急開窓戸報儂知 急いそぎて窓戸そうこを開ひらき 儂わしに報しりせて知しる。

(七言絶句・上平声四支韻)

語釈 幾回〓幾回、何回。欲起〓起きんと欲す、起きよつとする。起猶遅〓猶遅く起る。想到〓想い到る。前霄〓前の霄。
未了詩〓了らない詩。不分〓分けず。山妻〓山の妻。惜花落〓花落るを惜しむ。急開〓急に開く。窓戸〓窓と戸。報儂知
〓儂知る報せ。

49 阿漕浦

阿漕浦

佛燈一点影残闌
海氣吹腥飛雨寒
想得当年如此夜
孤舟提網上雪灘

佛燈の一点影残りて闌、
海氣吹いて腥く飛雨寒し。
想い得る当年此の夜の如き、
孤舟網を提げて雪灘に上る。

(七言絶句・上平声十寒支韻)

語釈 佛燈〓佛壇の燈。〓一点影〓一点の影。残闌〓残り闌。海氣〓海の氣。吹腥〓吹き腥い。飛雨寒〓飛ぶ雨が寒い。

想得〓想い得る。当年〓その年。如此夜〓此の夜の如く。孤舟〓一艘の舟。提網〓網を提げて。上雪灘〓雪の灘を上る。

嗟呼亭花下作

嗟呼亭花下の作

煙霞盟主去何之

煙霞 盟主 去つて何くにか之かん、

詩酒管絃蹤已非

詩酒 管絃 蹤已に非たり。

唯有櫻花長獻媚

唯だ有り 櫻花 媚を獻ずこと長く、

春風吹発又吹飛

春風 吹いて発き 又た吹きて飛ぶ。

(七言絶句・上平声五微韻)

語釈 煙霞〓煙と霞、露と霞。盟主〓諸侯を集結させて同盟締結の頭となる。去何之〓何んで之去る。詩酒〓詩と酒。管

絃〓管は笛、絃は琴。蹤已非跡はずでにない。唯有〓唯有る。櫻花〓櫻の花。長獻媚〓しなやかな美しさを獻じること長

し。春風〓東風。吹発〓吹き開く、咲く。又吹飛〓又吹き飛ぶ。

50 雪夜宿漁家 二首之一

雪の夜漁家の宿

島稜隱 名規 字景寬 京師人

江村路没雪逾加

江村路は没し 雪逾いよ加わり、

乞宿立門蓑似花

宿を乞い 門に立てば 蓑は花に似たり。

一点灯人結網

一点灯 人網を結ぶ、

初知此際は漁家

初めて知る 此の際 是れ漁家。

(七言絶句・下平声六麻韻)

語釈 江村〓川辺の村。路没〓路は没し。雪逾加〓雪は越えて加わる。乞宿〓宿を乞う。立門〓に立つ。蓑似花〓蓑に似

た花。一点〓灯人〓灯り、明かり。人結網〓人を結ぶ網。初知〓初めて知る。此際〓此の際。是れ漁家〓是れ漁家。

51 寒月 二首之一

寒月

詩人慣道月如霜

霜月併時無可方

只聳苦吟枯抗骨

忍寒消受滿窓光

詩人 慣らゆし道う 月霜の如しと、

霜月 併ぶ時 方むき可き無し。

只だ聳ゆ 苦吟 枯抗の骨に、

寒を忍び 消受 滿窓の光。

(七言絶句・下平声七陽韻)

語釈 詩人 詩を詠む人。慣道 慣れた道。月如霜 月霜の如く。霜月 霜夜の寒い月、陰曆七月の別称、(國) 陰曆十一月の

別称。併時 時に併せ。苦吟 吟に苦しむ。枯抗 骨 枯れた骨をつこかす。忍寒 寒さを忍ぶ。消受 消し受る。滿窓光 窓に

満ちる光。

52 楊太真授鸚鵡心経圖

楊太真鸚鵡心経の圖を授ける

雪衣雲鬢好因縁

雪衣 せつゐ 雲鬢 うんびん 好因縁 こういんねん

每把心経仔細傳

毎に心経を把りて 仔細を傳える。
つね しんぎょう と さいさい つた

色即是空終底処

色即 是空 終底の処、
しきやく ぜくう しゆうてい とこ

悲風吹尽馬嵬烟

悲風 吹き尽して 馬嵬に烟る。
ひふう ふつきく ばがい けむ

(七言絶句・下平声一先韻)

語釈 雪衣せつゐ 雪の衣。雲鬢うんびん 雲の鬢。好因縁こういんねん 好い因縁。每把まい 毎々とる。心経しんぎょう 般若心経。仔細傳さいさい 仔細を伝える、詳

細を伝える。色即是空しきやく 色即是空。終底処しゆうてい 終りで底の処。悲風ひふう 悲しい風。吹尽ふつきく 吹き尽し。馬嵬烟ばがい 馬嵬は烟むる、

唐代、安祿山の乱で玄宗皇帝が蜀に避難の途中、部下の乱で楊貴妃が殺された地、其の地が煙っている。

53 偶成

偶成

峰嶸吟骨似小禅

峰嶸 ほうた 吟骨 ぎんこつ 小禅 しょうぜん に似たり、

滌尽凡情亦自然

あら づく ぼんじょう ま しぜん
滌い尽す 凡情 亦た自然。

笑看梅花紙窓月

わら ばいか み しそう つき
笑つて梅花を見る 紙窓の月、

漫來枕上寫嬋妍

そぞろ きた ちんじょう せんけん うつ
漫に來りて 枕上 嬋妍を寫す。

(七言絶句・下平声一先韻)

語釈 峰みね|| 山のさまの意、峰。銀骨ぎんこつ|| 銀の骨。峰骨みねこつに雪ゆきが降り。似小禅しせぜん|| 小禅せうぜんに似る。滌尽らきじん|| 洗い尽くす。凡情ぼんじょう|| あり

ふれた情。笑看紙窓月わらみね|| 紙障子の窓の月。漫來そぞろ|| そぞろに來る。枕上ちんじょう|| 枕の上。寫嬋妍せんけん|| 嬋妍を寫す、艶やかで美しいさ

ま、上品で美しいさまを寫す。

54 湖村聞虫

二首之一 湖村虫を聞く

水村燈影夜三更

すいそん とうえい ねさんげ
水村の 燈影 夜三更、

州嶼如烟露又横

しゅうじよ けむ ごとく つゆ また よこ
州嶼は 烟りの如く 露は又た横たう。

紅蓼花遅未成錦

紅蓼こうりょうの花はなは遅おそく未いまだ錦にしきを成なさず、

中聴促織尽聲鳴

中うちに聴きく促織そくしやくの聲こゑは鳴なき尽つきる。

(七言絶句・下平声八庚韻)

語釈 水村水辺の村。燈の影。夜三更夜を五つに分けた第三の時刻、今の午後午後十二時の前後二時間ほど。州嶼

州と島嶼。如烟煙の如く、霞や霧のよう。紅蓼紅い蓼。花遅花が遅い。未成錦錦に成らない。中聴中に聴く。

促織こころぎ、秋になると寒くなるから機織りを急げと鳴くの意。尽聲鳴鳴く聲が尽る。

58 夜泊薇江

夜薇江に泊る

山帯微雲水帯煙

山帯さんたいの微雲びうん 水帯すいたいに煙けむる、

海郷秋思入無邊

海郷かいきょうの秋思しゅうし 無邊むへんに入る。

誰知滿枕芦花月

誰だれか知しる 枕まくらに満みつ 芦花ろかの月つき、

一夜凄然和影眠

一夜 凄然 影に和して眠る。

(七言絶句・下平声一先韻)

語釈 山帯 山に帯びる。微雲 微かな雲。水帯煙 水の帯が煙る。海郷 海の郷。秋思 秋を思つ。無邊に入る 誰知 誰か知る。満桃 満ちる桃。芦花月 芦花の月。凄然 凄いさま。さむい、きびしい。和影眠 影に和して眠りに。

59 論詩絶句 二十七首節五 絶句の詩を論ず

頼山陽 名襄 字子成 安藝人

正徳諸公尽出群

正徳 諸公 尽く群を出る

駭鷄雄雉各争文

駭鷄 雄雉 各おの 文を争う

翔空千仞求威鳳

空を翔け 千仞 威鳳を求む

當属筑州源使君

當に属す 筑州 源使君

(七言絶句・上平声十二文韻)

語釈 正徳〓正に徳。諸公〓諸々の公爵の大名、諸君、皆さん。尽出群〓群を出尽す。駭鷄〓驚く鷄。雄雉〓おす雉。各
 争文〓各文を争う。翔空〓空を翔ぶ、翔ける。千仞〓千尋、仞は高さや深さを測る単位、周代の七尺、(一説には八尺、一
 尺は二一・五センチ)。求威鳳〓求威鳳を求め、鳳のような威風堂々とした人材を求め。當属〓まさに仲間である。筑
 州〓筑前、筑後。源使君〓源は君をして。

濟南選法本澁漫

さいなん せんぽう ほんじゆまん
 濟南 選法 本澁漫

抉剔何勝後手刊

けつてき なん た ごて かん
 抉剔 何ぞ勝えん 後手に刊すを

金篋不醫徠翁眼

きんひ いや おうがん きた
 金篋 醫せず 翁眼を徠りて

猶從五里霧中看

なほ したが こり むちゆう み
 猶 從い五里 霧中 看る

(七言絶句・上平声十四寒韻)

語釈 濟南〓山東省、むかしの、濟水の南に位し、交通の要衝。選法〓選ぶ法。本澁漫〓本に満ちて潤つ。抉剔〓えぐり
 とる。何勝〓何に勝る、どうして堪える。後手刊〓後手に刊する。金篋〓金の篋。醫せず。〓徠翁眼〓翁の眼がきて、老

眼になつて。猶從^レ猶從^ル。五里霧中看^レ後漢の張楷が術で、五里四方霧にわたる霧を起こした故事。転じて物事に迷つて手がかりのないことの中で看る。

羽橋敢望玉山光

うきやう 敢^{あえ}望^{のぞ}めば 玉山^{ぎよくさん}の光^{こう}、

野鷺家鷄狂抑揚

やぼく 家鷄^{かけい} 抑揚^{よくやう}に狂^{くる}う。

万恠藁砧鴻雁語

ばんかい 藁砧^{こづちん} 鴻雁^{こうがん} 語^{かた}る、

勝化太白對流黃

しょうか 太白^{たいはく} 流黃^{りゅうわう}に對^{たい}す。

(七言絶句・下平声七陽韻)

語釈 羽橋^レ橋の名。敢望^レ敢えて望む。玉山光^レ玉山の光。野鷺^レ野のあひる。家鷄^レ鷄。狂抑揚^レ音楽・文章・話し方などの調子のあげさが狂う、誉めたりけなしたりする、時勢とともに浮き沈みする、浮沈。万恠^レいろいろ怪しむ。藁砧^レ夫を意味する隠語、むかし、まな板のような台に藁を敷き、その上に重罪人を臥せて鐵(まさかり、斧)で胴を切つた、鐵と夫が発音が同じだからいう。鴻雁語^レ鴻や雁が語る、離散してさすらう民が語る。勝化^レ太白^レ星の名、金星、

雁雁 夜の鴻と雁。 遙思遙思 遙に思つ。 塞北秋塞北秋 塞北の秋、 北方の辺境の地の秋。 肥後人肥後人 今の熊本県。 至今読之至今読之 今に至り
之を読む。 曰曰 言つ。 南郭一等也南郭一等也 南郭は一等なり

評姿群靚宋元層

ひょう すがた ぐんみ そうげん そう
評す姿 群靚る 宋元の層、

論味争収中晚腹

ろんみ あらそ おそ
論味 争い収めて 晚腹の中。

断粉零香合時嗜

ふん た れいこう とぎ あわ たしな
粉を断つ 零香 時に合せて嗜む、

問君何苦学韓蘇

きみ と なにくる かんそ まな
君に問う 何苦しむ 韓蘇に学ぶ。

(七言絶句・下平声十蒸韻)

語釈 評姿評姿 評す姿。 群靚群靚 群を靚る。 宋元層宋元層 宋と元の層。 論味論味 議論の味。 争収争収 争を収める。 中晚腹中晚腹 晚腹の中。

断粉断粉 粉を断つ、 詩歌や文章の手本を断つ。 零香零香 細かい香、 僅かな香。 合時嗜合時嗜 時に合つて嗜む。 問君問君 君に問う。 何

苦苦 何の苦。 学韓蘇学韓蘇 韓蘇に学ぶ。

文章於世本織塵

文章ぶんしょう 世よに於おいて 本織塵もとせんじん

唯恐頹波没旧津

唯ただ恐おそる 頹波たいは 旧津きゅうしんを没ぼつするを。

欲掣鯨魚無氣力

鯨魚けいぎよを 掣せいせんと欲ほつす 氣力きりよく無し、

半生徒被喚詩人

半生はんせい 徒いたすらに詩人しじんと喚よばる。

(七言絶句・上平声十一真韻)

語釈 文章ぶんしょう「あや、もよう、かざり、礼楽れいらく(礼節と音楽)や制度など、國の文化を形成しているもの。於世おのよ「世に於いて

本織塵もとせんじん「本に織オリかい塵、取るに足らないもの。唯恐ただおそ「唯恐れる。頹波たいは「頹廢の波、傾向、くずれかけた波、衰退の勢い。

没旧津ぼつきゅうしん「旧津を没す、古い港。欲掣ほつせい「掣せいを欲す、制御、制裁。鯨魚けいぎよ「鯨、鐘をつく撞木の異称。無氣力むきりよく「氣力の無いこと。

半生はんせい「生涯の半分。徒被いたすら「被の徒、あの人達。喚詩人よしじん「喚く詩人。

60 修史偶題

題だいす 修史偶しゅうしふく

作十一首節四

蠹冊紛披烟海深

とせつ 紛れて披く 烟海深し、

援筆欲下復沈吟

えんひつ 援筆を下さんと欲するも 復た沈吟す。

愛憎恐枉英雄迹

あいぞう 枉を恐る 英雄の迹、

獨有寒燈照此心

ひこ 獨り寒燈の此の 心を照す有り。

(七言絶句・下平声十二侵韻)

語釈 蠹冊 虫の喰った書物。紛披 紛れ披く、花が乱れ咲くこと、ばらばらに乱れるさま、烟 けむり、靄と霧。海深

深い海。援筆 筆を執って字を書く。復沈吟 復沈吟する、思いに耽つて口ずさむ、思いを潜め充分に検討する。愛憎

愛と憎しみ。恐枉 曲げることを恐れる、道理を押し曲げる。英雄迹 英雄の迹、跡。獨有 獨有り。寒燈 孤燈、寂し

げな燈、冬の夜の灯火。照此心 此の心を照らす。

千載將誅老姦骨

せんざい 千載 將に誅せんとす 老姦の骨、

九原要慰大冤魂

きゅうげん 九原 慰むを要す 大冤の魂。

莫言鉛槧無權力

い なか
言う莫れ 鉛槧は 権力無しと、
えんざん けんりよくな

公議終須紙上論

こうぎ さい
公議 終に 紙上に論ずべし。
しじょう ろん

(七言絶句・上平声十三元韻)

語釈 千載〓千年。將誅〓將に誅す、本當に殺す。老姦骨〓老いた骨のある姦物、老獪な悪知恵のある者。九原〓春秋時

代晋の卿大夫の墓場の名、転じて、あの世、よみじ、墓地。要慰〓慰を要す。大冤魂〓大冤の魂、大きな恨み、大きな冤

罪、無実の罪。鉛槧〓鉛の札。無權力〓権力無し。公議〓一般の議論、世論。終須〓すべて終る。紙上論〓紙上の論、空

論。

龍戦曾經八州迹

りゅうせん かつへ
龍戦 曾て経る 八州の迹、
はっしゅう せき

鶴巢終審一枝安

かくそう しまひちら
鶴巢 審に終る 一枝の安んず。
いっし やす

却収当日投餘筆

かえ かつひ
却つて 当日 投餘の筆を収め、
とうじつ とうじふ ぶで おか

自写千軍萬馬看

みずか うつ
自ら写す 千軍 萬馬を看る。
せんぐん ばんば み

(七言絶句・上平声十三元韻)

語釈 龍戰〓龍の戦、王者、天子の戦い。曾經〓曾て経る。迹〓八州の迹、中国全土、昔中国を九州に分けたから、ある一国から、都の地からみれば他の全土は八州になる。鶴巢〓鶴の巢、審終〓審に終る、明らかにして終わる。一枝安〓一枝の安、一枝の安らぎ。〓却つて収る。当日〓その日。投餘筆〓筆を餘して投げる。自写〓自ら写す。千軍〓千の軍、数の多いこと。万馬看〓万の馬を見る、数の多いこと。

野史亭前無数山

野史 亭前 無数の山、

某岡某阜事相因

某岡 某阜 事相因む。

倦來拋筆時呼酒

倦み來れば 筆を拋ちて 時に酒を呼ぶ、

歴歴興亡指点問

歴歴たり 興亡を 指点の間。

(七言絶句・上平声十一真韻)

語釈 野史〓民間の学者が個人的に著した歴史、外史、稗史。〓亭の前、東屋の前。無数山〓無数の山、数の多いさま。

某岡〓無名の岡、丘、陵。阜。某阜〓無名の阜、事岡、丘、陵。〓相因む。倦來〓倦きて來たる。抛筆〓筆を抛つた、書くことを止めた。時呼酒〓酒を飲む時。歴歴〓歴然、明らか。真亡〓真に亡ぶ、本当に亡ぶ。指点問〓指点の間、僅かな間。

61 春曉

春曉

梁星巖 名緯 字一函 美濃人

風香如水入簾流

風は水の如く香り 簾に入りて流れ、

林月餘光閃未収

林月の餘光 閃を未だ収めず。

生愛花間鶯試唱

生愛 花間 鶯唱を試す、

引人残夢到楊州

人は残夢を引いて 楊州に到る。

(七言絶句・下平声十一尤韻)

語釈 風香〓風の香り。如水〓水の如し。入簾流〓簾流に入る。林月〓林の月。餘光〓もれてくる光、夜明けの月。閃未

収と閃ひらきを収とめない、まだ、閃ひらいている。生なま愛あ＝生なまきいきと愛あす。花はな間ま＝花はなの間。鶯うぐいす試し唱な＝鶯うぐいすが試しに唱なえる、鶯うぐいすが鳴なきはじめる。＝人ひとを引ひく。残のこ夢ゆめ＝残のこりの夢ゆめ。到いた楊やう州しゅう＝楊やう州しゅうに到いたる。(梁りやう川せん星せい巖がん)

62 舟抵廣嶋

廣嶋に舟抵

水底残霞魚尾頼

水底すいていの 残霞ざんか 魚尾うおびの頼てい、

菰蒲葉戦暮潮生

菰蒲こほ 葉はは戦あのの 暮潮ぼちやうしやう生せいず。

扁舟不借風帆便

扁舟へんしゆう 借かりず 風帆ふうはんの便びん、

一路溶溶流入城

一路いちろ 溶溶ようよう 流ながれて城じやうに入いる。

(七言絶句・下平声八庚韻)

語釈 水底すいてい＝水の底。残霞ざんか＝残の霞。魚尾うおび頼てい＝魚の尾が赤い、魚は疲れると尾が赤くなる。菰蒲こほ＝菰と蒲。葉戦はあ＝葉が戦あく。風ふうが霜しもや風かぜに枯かれまいとして戦あう。暮潮ぼちやうしやう生せいず＝夕暮の潮に生せいじる。扁舟へんしゆう＝小舟、底の平たい小舟。不借ふか＝借かりない。風ふう

帆便＝風帆の便。一路＝真つ直ぐに。溶溶＝広大なさま、心・水その他を廣く形容する。流入城＝城に流れ入る、町に流れ入る。

63 二月晦日拉諸子遊糸崎 二月晦日諸子を拉し糸崎に遊ぶ

詩酒還成半日遊

詩酒ししゅ 還また成なす 半日はんじつの遊ゆう

此生隨處送悠悠

此この生せい 隨處ずいしょ 悠悠ゆうゆうとして送おくる。

他年夢裡問陳迹

他年たねん 夢裡むり 陳迹ちんせきを問とう、

細雨春帆双鷺州

細雨さいうの春帆しゅんぱん 双鷺そうろの州しゅう。

海上有大小鷺州

海上かいじょう 大小だいしやう 有あり鷺さぎの州しゅう

(七言絶句・下平声十一尤韻)

語釈 詩酒＝詩と酒。還成＝還り成す。半日遊＝半日の遊び。此生＝此の生涯。隨處＝いたる處。送悠悠＝悠悠と送る、

うれえるさま、遠く遙かなさま、閑のあるさま、のんびりしたさま、悠々自適。他事〓他の事、よそ事。夢裡〓夢の裡、夢の中。問陳迹〓昔物事のあつた跡を問う、古くから今に残っている跡を問う、なごり。細雨〓細い雨、小雨、こぬか雨。春帆〓春の帆。双鷺州〓双鷺の州。

64 題玉葆女史画常警抱孤図 玉葆女史画く常警抱孤の図に題す

雪壓笠檐風捲袂

雪は笠檐を壓して 風は袂を捲く、

呱呱索乳若為情

呱呱 乳を索す 若為の情。

他年鉄拐峰頭嶮

他年 鉄拐 峰頭の嶮、

叱咤三軍是此声

三軍を 叱咤 是れ此の声で。

(七言絶句・下平声八庚韻)

語釈 雪壓〓雪を壓する。笠檐〓笠のひさし。風捲袂〓袂を捲く風。呱呱〓乳飲み子、嬰兒の泣き声の形容、牛若丸。索

乳^ニ乳を索^ガす、乳を求め^ル。若^シ為^シ情^ニどんな氣持^チか。他^ノ年^ニ三十五年後^ノの^一の谷^ノの合戦^ヲをさ^ス。鉄拐^ニ鉄拐峰^ノのこと、
六甲山^ノの^一峰^ヲ。峰頭^嶮ニ峰頭^ノの嶮^{シク}。叱咤^ニ叱り^ツける、叱^ル声^ヲ。三軍^ニ周^ノの制度^ヲで、天子^ノの六軍^ニ対^スる、諸侯^ノの大
国^ノの上軍[・]中軍[・]下軍^ノの總稱^ヲ、一軍^ハ一萬二千五百人[、]軍隊^ノの總稱[、]全軍[、]大軍^ノのこと。是^レ此^ノ声^ニ是^レ此^ノ声^ヲで。
結句^ハ、大軍^ヲを指揮^シて号令^スするのは、あ^ノの嬰兒^ノの大音声^ニである。

65 春初雜詩

春初雜詩

手^テ淪^シ春泉^ニ氣味^ハ嚴^シ
推^シ窓^ヲ殘^シ雪^ヲ照^シ書籤^ヲ
何^レ來^ル饑^シ鳥^ノ聲^ハ如^シ磬^ノ
啄^リ我^ノ梅^ノ花^ヲ上^ニ凍^リ簷^ニ

手^テを春泉^ニに淪^シむれば 氣味^ハ嚴^シ、
窓^ヲを推^シす 殘^シ雪^ヲ 書籤^ヲを照^シらす。
何^レぞ來^ルたりて 饑^シ鳥^ノ 聲^ハは磬^ノの如^シく、
我^ノが梅^ノ花^ヲを啄^リみて 凍^リ簷^ニに上^ル。

(七言絶句・下平声十四塩韻)

語釈 手淪＝手でさざ波を立てる。春泉＝春の泉。氣味敵＝敵しい氣味。推窓＝窓を推す、開く。照書籤＝書籤を照らす、籤はかずとり、くじ、物を数えるときの棒。何來＝どうして来た。饑鳥＝飢えた鳥。声如磬＝の如き声、磬は中国古代の樂器の一つ、石や玉で作ったへの字形の打樂器を台に吊して鳴らす、啄我＝我啄む。上凍簷＝凍えた庇に上る、軒。

66 酔題

酔題

銅雀臺廢金谷塵

銅雀臺は金谷の塵に塵れ、

西陵東市可哀呻

西陵東市 呻を哀れむ可し。

幕天一醉唯堪幕

幕天一醉 唯だ幕に堪る、

擬買春糸繡伯倫

春糸を 買を擬す 伯倫の繡。

(七言絶句・上平声十一真韻)

語釈 銅雀＝銅雀臺、三国の魏の曹操が築いた展望台。臺廢＝金谷塵＝河南省の洛陽縣北西の谷の名。西陵＝西の陵。東

市ニ東の市。可哀呻ニ呻き哀れむ可し。幕天ニ天幕。一醉ニ酔つ。唯堪幕ニ唯幕に堪える。擬買ニ買う振りをする。春糸
ニ春の糸。繡伯倫ニ晋の文人、酒飲みで有名、刺繡、繡

67 春尽日遊沙川旗亭

春尽日沙川旗亭に遊ぶ

二首之一

送春豈惜累千觴

送春そうしゅん 豈あに 累千るいせんの觴こうを惜おしまん、

要遣中年以後情

要ようは中年ちゅうねんに遣やる 以後いごの情じょう。

不分紫藤花底水

分わけず紫藤しとう 花底かていの水みず、

鳴鳴還作別離声

鳴鳴めいめい 還また作なす 別離べつりの聲こえ。

語釈 送春ニ送る春。豈惜ニどうして惜しむ。累千觴ニ累々と多くの角の盃。要遣ニ遣いを要す。以後情ニ以後の情。不

分ニ分けず。紫藤ニ紫の藤。花底水ニ水底に沈んだ花。鳴鳴ニああ。還作ニまた作る。別離声ニ別離の聲、別れの聲。

對床無語澹如忘

床しょうに對たいし 語ご無なし 澹たんとして忘わするが如ごとく

忽漫争誇耳孔長

忽こつ漫まん 争あらそい誇ほこる 耳じ孔こう長ながし

聽做杜鵑真好笑

聽きいて杜と鵑けんを做なし 真しんに好よく笑わらい

一声叫月赤班唐

一いっ聲せい 月つきに叫はく 赤せき班はん唐たう

赤班唐和名跋横・声絶似子規

赤班唐 和名 跋横・声絶 子規に似る

(七言絶句・下平声七陽韻)

語釈 對床たいしょう 對床に對して。無語むご 言葉無し、語らない。澹如忘たんごとくわす 澹の如く緩やかに忘れる、淵のように緩やかに忘れる。

忽漫こつまん 忽漫に、そぞろに。争誇あらそいほこ 争い誇る、競いて誇る、自慢。耳孔長じこうなが 早耳。聽做きいてな 聴き做す、聴き作す。杜鵑とけん 子規、

ほとぎす。真好笑しんごうせう 真に好んで笑つ。一声いっせい 一と声。吐月とつき 月が出る。赤班唐せきはんたう

金籠妖夢馬嵬魂

金籠こんろう 妖夢ようむ 馬嵬の魂ばがいこん

是色是空君勿論

是色ぜしき 是空ぜくう 君論きみろん ずる勿なかれ。

只好琅琅相對誦

只好たこの 琅琅ろうろう 相對あたい 誦しよつす、

花枝解語鳥能言

花枝かし 語ごを解かいして 鳥言とりげんを能よくす。

(七言絶句・上平声十三元韻)

語釈 金籠金の籠。妖夢妖しい夢。馬嵬魂馬嵬の魂、馬嵬は楊貴妃が臣下の反乱で殺された所。是色是空色即是

空、現世のあらゆる事物、現象は、本来空無であるの意。君勿論君も勿論。只好好即好む。琅琅金屬や玉が触れ合つて鳴る音のさま、鳥のきよらかな囀り。相對誦相對して誦える。花枝花の枝。解語語を解す。鳥能言鳥能く言つ。

祝星聆 名希烈 字廷耀 近江人

看花則喜惜花悲

花はなをみ見て 則すなわち喜よろこび 花はなをおし惜かなみて悲かなしむ、

自使羈情入小詩

自あのみら 羈きじょう情じょうして 小詩しょうしに入いる。

分付子規休吐月

分付ぶんぷす 子規しき 月つきに吐はくを休やめよ、

五更春夢到家時

五更ごこうの 春夢しゅんむ 家いえに到いたる時とき。

(七言絶句・上平声四支韻)

語釈 看花〓花〓を看〓る。 則喜〓 則喜〓ぶ。 惜花悲〓 花〓を惜〓しんで悲〓しむ。 羈情〓 情〓をつなぎとめる、 羈〓はおもがい、 たずな、

つなく、旅〓の情〓。 入小詩〓 小詩〓に入〓る。 分付〓 分〓けて付〓す。 子規〓 不〓如〓帰〓、 時鳥〓 ほととぎす。 休吐月〓 月夜〓は啼〓くのを

止〓めてくれとの意〓。 五更〓 夕暮〓れから夜明〓けまでを五〓つに分〓け、 初更〓・二更〓・三更〓・四更〓・五更〓に分〓かれ夜番〓が交替〓する

ので更〓という。 春夢〓 春〓も夢〓。 〓 家時〓に到〓る。 舩れい 〓 屋形船〓のこと。

71 甲辰十三夜

甲辰十三夜

山窓對雨咲吾衰

さんそう 雨に對し 吾が衰えを咲う、

芋栗炮燔伴小兒

うりつ 炮燔するは 小兒に伴う。

尋思三十年間事

じんし 尋思す 三十年間の事、

多多失脚月明期

た た 失脚 月明の期は。

(七言絶句・上平声四支韻)

語釈 山窓 山側の窓。對雨 雨に對する。咲吾衰 咲き吾衰える。芋栗 芋と栗。炮燔 あぶり焼く。伴小兒 小兒を

伴う。尋思 思い尋ねる。多多 数が多い、多ければ多いほど。失脚 足を踏み外す、失敗して地位をつしなう。月明期

月明の期。

72 月梅

月梅

白模糊裡夜三更

しろもこ 白模糊の裡 夜三更、

春暉籠人不耐情

しゅんき 籠人 情に耐ず。

看到影疎香暗處

み 看すみす 影疎に 香暗の到る處、

梅花與月故分明

ばいか 梅花と月と 故に分明。

(七言絶句・上平声四支韻)

語釈 白模糊裡＝白く模糊の裡、白くぼんやりしてはつきりしない。夜三更＝夜の三更、今の午後十二時の前後二時間ほ

ど。＝春暉やく。籠人＝籠を背負った人。不耐情＝情に耐へず。看到＝看るに到る。影疎＝疎らな影。香暗處＝香暗の處、

何処からとも知れない良い香り。梅花＝梅の花。月と＝故分明＝故に分明、故に明らか、殊更にはつきりしている。

73 春日江村

春日江村

摩嶋松南 名弘 字子毅 京師人

隔水青山隔樹家

みず 水を隔てて 青山 樹家を隔て、

垂楊湾上買魚蝦

すいよう 垂楊の湾上 魚蝦を買つ。

扁舟載酒何邊去

扁舟へんしゅう 酒を載せ何邊にか去くさけのなへん

遠浦紅雲定是花

遠浦えんほの 紅雲こううん 定まりて是れ花さたこはな

(七言絶句・下平声六麻韻)

語釈 隔水水を隔てて。青山青々と樹木の茂つてるやま、男子は何処の青山でも骨を埋めることができる、必ずしも

故郷で死ななくてもよいということ。隔樹家樹木で家で隔てる。垂楊垂れた楊。湾上湾の上。買魚蝦魚や蝦をか

う。扁舟底の平たい小舟。載酒酒を載せて。何邊去何邊かに去る。遠浦遠い浦。紅雲紅の雲。定是花定まつ

て是花。(長弘、一七九一〜一八三九)

74 初秋獨座

初秋獨座す

三両微微竹末星

三両さんりょう 微微びび 竹末の星ちくまつほし

隨風隱見似殘螢

風かぜに隨したがつて 隱見するは 殘螢ざんけいに似にたり。

夜來不識何邊雨
送得餘涼入小庭

夜來やらい 識しらず 何邊なへんの雨あめ、
餘涼よじょうを 送おくり得えて 小庭しょうていに入いる。

(七言絶句・下平声九青韻)

語釈 三兩〓一二三つ。微微〓僅か、僅少、微小、小さな、微かな、勢いの振るわないさま。竹末星〓竹の末の星。隨風〓風に隨い。隱見〓見え隠れする。似殘螢〓殘螢に似る。夜來〓夜から夜明けまで。不識〓知らない。何邊雨〓何邊の、雨何処の雨、送得〓送り得る。餘涼〓残りの涼しさ。入小庭〓小さな庭に入る。

75 瓶梅

瓶梅

經旬猶插爛開枝
便覺瓶梅割愛遲
短帳無風花自落

旬しゅんを經へて 猶なお挿さす 枝えだに開ひらくこと 闌たけなわに、
便すなわち覺おぼえる 瓶梅へいばい 割かつ愛あい遲おそし。
短帳たんちやう 無風むふう 花はなは自おのずと落おつ、

半窓斜月客敲棋

はんそう つき ななめ
半窓 月は斜に 客は棋を敲つ。

(七言絶句・上平声四支韻)

語釈 経句〓旬を経て猶挿〓猶挿す、猶挿し木をする。 関開枝〓満開の枝。 便覺〓すなわち覺える。 瓶梅〓瓶に挿した梅。

割愛遅〓愛する物を断ち切つてはなすのが遅い、美味しい物を思い切つてあたえるのが遅い。 短帳〓無風〓花自落〓半窓

〓斜月〓月は斜に。 客敲棋〓客は棋を敲つ、客と将棋を打つ。

76 遊宇治

宇治に遊ぶ

十四年前遊此間

じゅうよねんまえ
十四年前 此の間を遊ぶ、

于今踪迹托塵寰

うこん しょうせき
于今 踪迹は 塵寰に托す。

吟行重到清溪上

ぎんこう かねて いた せいけい
吟行 重ねて到る清溪の上り、

袖手看雲太厚顔

て そで くも み はなは こうがん
手を袖に 雲を看る 太だ厚顔。

語釈 遊此間〓此の間を遊ぶ。于今〓今ここに。踪迹〓跡、事跡、足跡、以前あつた事柄。托塵寰〓塵寰に托す、煩わしいこの世界に託す、汚れた世、人間世界。吟行〓吟じて行く、詩を詠む。重到〓重り到る。清溪上〓清らかな溪の上。袖手〓手を袖に、何も手出しをしない。看雲〓雲を見る。太厚顔〓太く厚い顔、厚顔無恥。

(七言絶句・上平声十五刪韻)

77 美人吹笛圖

美人吹笛の圖

曾学阿郎吹玉笛
每吹玉笛便思郎
春光易老人難見
落尽梅花更断腸

曾^{かつ}学^{まな}阿^{あろう}郎^{あろう}吹^ふ玉^{ぎよくてき}笛^{ぎよくてき}
每^{つね}に吹^ふいて 玉^{ぎよくてき}笛^{ぎよくてき}を 便^{すなわ}ち郎^{らう}を思^{おも}う。
春^{しゅん}光^{こう} 老^おい易^{やす}く 人^{ひと}見^みわれ難^{かた}く、
落^おち尽^{つく}す 梅^{ばい}花^か 更^{さら}に断^{だん}腸^{ちよう}。

(七言絶句・下平声七陽韻)

語釈 曾学〓曾て学ぶ。阿郎〓阿る男。吹玉笛〓玉笛を吹く。每吹〓吹く毎に。玉笛〓玉の笛。便思郎〓すなわち男は思
う。春光〓春の光。易老〓老い易い。人難見〓人を見ることが難である。落尽〓落ち尽した。〓梅の花。更断腸〓更に断
腸、はらわたが千切れるように悲しむ。

78 讀李忠定公集 二首之一 李忠定公集を讀む

鉄心同咏梅花賦

てつしん とま えい ばいか
鉄心 同に咏ず 梅花の賦、

千古高風在両賢

せんこ こうふう りょうけん あ
千古の 高風 両賢に在り。

恨殺詩人無眼力

こんざつ しじん がんりきな
恨殺す 詩人の 眼力無きを、

空将知己属逋仙

むなし まさな ちき ほせん しよく
空く将に 知己 逋仙に属す。

(七言絶句・下平声一先韻)

語釈 鉄心〓鉄や石のように堅固な精神、強い真心。同〓ともに咏ずる、詠う、詠む。梅花賦〓梅花の賦、梅花の詩。千

古〓千年の昔、大変大昔から。高風〓優れた人柄、高い空を吹き渡る風。〓両賢に在り、二人の賢人にあり。恨殺〓恨みは深い、惜しむらくは。無眼力〓眼力無し、見る見識がない。空将〓将に空である。知己〓すでに知る。属連仙〓世を隠遁した仙人のなかま、逃れた。

明治庚寅秋日著

文政絶句抄

畢